

由良川中・下流域の住居

— 竪穴住居を中心として —

藤原敏晃

1. はじめに

京都府北部地域は、景初4年銘鏡の発見に^(注1)続き、青龍3年銘鏡が出土し^(注2)、弥生時代から古墳時代を考えるうえで貴重な遺物が出現した地域として、非常に注目を集めている。また、「丹後王国」などと呼ばれ、一大地域国家の存在も論じられる所でも^(注3)ある。ただ、その注目点や根拠となるものは、網野町銚子山古墳(全長198m)等の大古墳や先述の鏡が出土した墳墓等のいわゆる「墓」を中心としたものである。以前は、目につきやすい古墳やその調査がこの地域の資料の中心であったことが、その主原因であろう。

だが言うまでもなく、一つの地域は、墓だけではなく住居や生産の場等の総体から形造られるものである。したがって、この地域や社会を考えるにあたっては、墓制の分析と同様に地域の他の構成要素も見ていく必要がある。

由良川中・下流域においても、この10数年来の地域開発の進行にともなう事前の発掘調査によって、墓以外の調査成果も飛躍的に増大した。この拙文は、そうした発掘調査の報告をもとに、由良川中・下流域の住居を分析の中心として、当地域の弥生時代から奈良時代を考える1ヒントを探る試みである。ここで扱う由良川中・下流域とは、現在の福知山市、綾部市、大江町、夜久野町、舞鶴市を対象地としたものである。

当該地の住居については、各『報告書』等の論考に種々述べられているが、ここで取り上げるように複数の遺跡にわたるものは多くない。管見ではあるが、田代弘氏の『由良川中流域の弥生時代中期の集落遺跡について』において^(注4)、分布を中心に、集落論が展開されている。西岸秀文氏の『由良川流域の古墳時代集落概観』の中では^(注5)、古墳時代後期の由良川中・下流域の集落の住居の流れが予察的に触れられた。また、細川康晴氏は『奈良時代の掘立柱建物跡について』において^(注6)、京都府の掘立柱建物の動向を述べられている。加えて、拙文『中丹地域における8世紀の竪穴住居跡』^(注7)でこの時期の竪穴住居跡について検討をしたことがある。

なお、時期区分は、各報告書を基本とし、弥生時代中期中葉(Ⅲ様式併行期)・同中期後葉(Ⅳ様式併行期)・同後期・同末期～庄内式併行期・古墳時代前期・同中期・同後期・同

末期(6世紀末～7世紀初)・飛鳥時代(7世紀)・奈良時代(8世紀)に区分した。また、「住居について」といっても様々な要素をふまえないければならないが、ここで主に問題としたのは住居跡の面積である。資料的に問題も残るが、できるだけ多くの資料の中で考えていくという点から、一辺のみが明らかとなっている住居跡であっても、単純に平方して資料化した。

2. 竪穴住居跡の規模

住居規模の変化を研究したものに、都出比呂志氏の『家とムラ』^(注8)がある。ここでは、住居の規模を論じるに当たり、要約すると以下のような指摘をされている。「近代以前の集落はどの時代をとっても基本的には独立棟の群集から成り立っている。住居が1棟単独で存在する例は少ない。複数の住居がまとまって、1家族集団を考える主張は正しい。しかし、それは、1棟ごとの機能や個性を軽視している」。ここでも、この指摘に従って、それぞれの住居は一定独立したものとして取扱い、各面積を求め、文を進めていくことにする。

由良川流域の竪穴住居跡規模を一覧にまとめると付表1のようになる。まず、この表を簡単に説明しておきたい。これは、先に示した範囲の由良川流域における竪穴住居跡を、各報告書の時期区分によって、面積10m²ごとの幅で、その基数を数えたものである。総数の内の有効基数とは、単純に平方で面積を求めたものを含む、面積が判明した住居跡の数である。同時に面積の平均値も求めた。小計の欄は、時代ごとに基数を数え、各時代ごとの住居跡の面積の平均も付け加えた。

尚、この表を由良川流域竪穴住居跡規模分布表と名付ける。

3. 由良川流域竪穴住居跡規模分布表(付表1)から読み取れること

(1) 時期別特色

弥生時代中期中葉 この時期のもので、面積がわかるものは7基である。その内、面積の最高は50m²代のものである。面積平均は35.3m²で、10m²以下のものが1基見られる。

弥生時代中期後葉 面積が判明したものは26基である。10m²代が23.8%とやや多いものの、どの規模も大差なく、10m²以下から60m²代まで10%前後で間断なく分布している。そして、前の時期には見当たらなかった60m²以上のものが出現してくる(23%)。中でも際だつのは150m²代のものである。したがって、面積平均は40.2m²と大きくなる。150m²代のもので、表を見ても他のどの時期にも見られず特殊である。これは、志高遺跡で検出された^(注9)もので、全面は検出されていないが、壁高が50cmと非常に残りの良いものである。床面中央には直径1m以上の土壇があり、その周囲2カ所から炉跡が検出されている。規模こそ

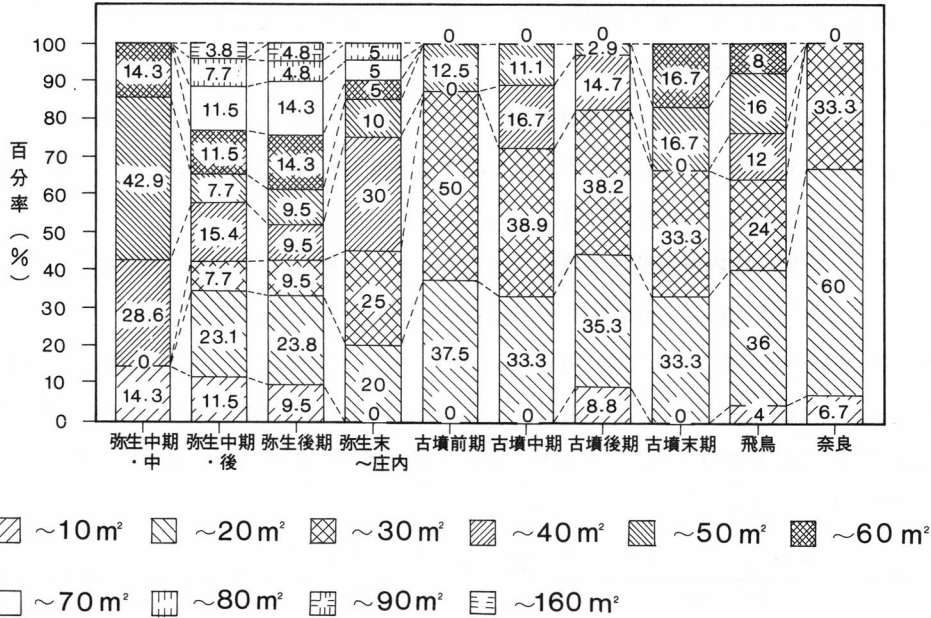
ずば抜けて広いものの、構造は周囲で検出されている同時期の住居跡と変わらず、住まいの機能を持っていたと考えられる。

弥生時代後期 弥生時代中期後葉と似たような傾向で分布し、平均面積も変わらない。有効基数は21基である。60㎡以上のものも23.9%を占め同様の傾向である。ただ、規模の最大は80㎡代である。10㎡以下は11.5%となる。

弥生時代末期～庄内併行期 面積の判明したものは20基である。弥生時代後期の様相と比較して大きな変化は見られない。違いは、10㎡代のものが検出されていないことと、50㎡代以上のものの占める割合がやや減った程度である。10㎡以上～40㎡未満が4分の3(75%)を占める。これまでが五割前後であるのと比較すると特徴的である。また、60㎡以上が10%とこれまでの半分以下となり、堅穴住居規模が平均化していく兆候が見られる。床面積の平均は33.09㎡で少し狭くなる。

付表1 由良川流域堅穴住居跡規模分布表

	～10 ㎡	～20 ㎡	～30 ㎡	～40 ㎡	～50 ㎡	～60 ㎡	～70 ㎡	～80 ㎡	～90 ㎡	～100 ㎡	～160 ㎡	面積 平均	有効 棟数	総数
弥生中期・中	1	0	0	2	3	1	0	0	0	0	0	35.3	7	10
%	14.3	0	0	28.6	42.9	14.3	0	0	0	0	0		100.1	
弥生中期・後	3	6	2	4	2	3	3	2	0	0	1	40.2	26	26
%	11.5	23.1	7.7	15.4	7.7	11.5	11.5	7.7	0	0	3.8		99.9	
弥生後期	2	5	2	2	2	3	3	1	1	0	0	39.4	21	27
%	9.5	23.8	9.5	9.5	9.5	14.3	14.3	4.8	4.8	0	0		100	
弥生末～庄内	0	4	5	6	2	1	1	1	0	0	0	33.09	20	23
%	0	20	25	30	10	5	5	5	0	0	0		100	
小計面積平均	6	15	9	14	9	8	7	4	1	0	1	37	74	86
小計%	8.1	20.3	12.2	18.9	12.2	10.8	9.5	5.4	1.4	0	1.4		100	
古墳前期	0	6	8	0	2	0	0	0	0	0	0	23.89	16	19
%	0	37.5	50	0	12.5	0	0	0	0	0	0		100	
古墳中期	0	6	7	3	2	0	0	0	0	0	0	26.93	18	19
%	0	33.3	38.9	16.7	11.1	0	0	0	0	0	0		100	
古墳後期	3	12	13	5	1	0	0	0	0	0	0	21.4	34	42
%	8.8	35.3	38.2	14.7	2.9	0	0	0	0	0	0		99.9	
古墳末期	0	2	2	0	1	1	0	0	0	0	0	25.38	6	6
%	0	33.3	33.3	0	16.7	16.7	0	0	0	0	0		100	
小計面積平均	3	26	30	8	6	1	0	0	0	0	0	24.4	74	153
%	4.1	35.1	40.5	10.8	8.1	1.4	0	0	0	0	0		100	
飛鳥	1	9	6	3	4	2	0	0	0	0	0	25.99	25	30
%	4	36	24	12	16	8	0	0	0	0	0		100	
奈良	1	9	5	0	0	0	0	0	0	0	0	17.31	15	18
%	6.7	60	33.3	0	0	0	0	0	0	0	0		100	
大計面積平均	11	59	50	25	19	11	7	4	1	0	1	28.89	188	220
%	5.9	31.4	26.6	13.3	10.1	5.9	3.7	2.1	0.5	0	0.5		100	114.2



第1図 由良川流域竪穴住居跡規模分布図(グラフ)

古墳時代前期 10m²未満と50m²以上は検出されていない。10m²以上から30m²以下で85.7%の高率を占める。弥生時代末～庄内期に見られた平均化の兆候が顕著となっている。この他は40m²代が2基検出されているのみである。平均床面積は23.89m²で、弥生時代の平均床面積37m²と比較すると、約3分の2の広さである。有効基数は16基である。

古墳時代中期 前期同様、10m²未満と50m²以上は検出されていない。面積が求められたものは18基である。10m²以上から30m²以下が72.2%と前期よりもこの間が占める割合はやや下がるものの、30m²代を加えると88.9%となる。平均の床面積は26.93m²である。約9割のものが平均床面積の前後に集中する。

古墳時代後期 面積が求められたものはやや多く、34基ある。古墳時代前・中期とほぼ似た傾向にある。ただし、弥生時代末期から姿が消えていた10m²以下のものが、再び約1割弱出現している。竪穴住居跡の床面積の平均は21.4m²である。

古墳時代末期 末期という時期区分に報告されているもの自体少なく、面積のわかったものは6基であるが、古墳時代の他の時期と同様の傾向を示す。ただ50m²代のものが、この時期再び出現する。床面積の平均値は25.38m²である。

飛鳥時代 10m²以下から50m²代まで分布し、その中心は10m²代と20m²代である(60%)。有効基数は25基である。しかし、古墳時代前期から後期にかけては見当たらなかった50m²代のものが8%、その下の40m²代を加えると24%となり、古墳時代末期を含め、大きい部類のものが占める割合が増えた。平均床面積は25.99m²で、古墳時代全般と変わらない。

奈良時代 面積の判明数は15基である。10m²以下から30m²未満に分布している。平均床面積17.31m²を見ても明らかなように、小型化している。しかも、平均面積の前後に当たる10m²代と20m²代が93.3%を占め、均一化として考えられる。

(2) 竪穴住居跡の床面積

① 一般成員の住居

弥生時代中期中葉から奈良時代までの竪穴住居跡の床面積の分布(第1図)を眺めてみると、各時期それぞれに特徴点もあるが、全般的に見て分布の中心は10m²代から30m²代であることがわかる(全体的に見ると、この範囲の広さのものが71%を占める)。床面積の総平均が28.89m²であることからしても、この数値の前後が多くの方の住居の広さであったと考えられる。

ここで参考として、由良川流域の掘立柱建物跡規模分布表(付表2)を見てみる。竪穴住居跡と比較して検出数は少ないものの、一定の傾向は見られる。

規模の分布を見ると、竪穴住居跡の分布と同様に、10m²代から30m²代の範囲に多くが集まっている。その割合は74.3%で、これはほぼ竪穴住居跡規模の分布と同じである。床面積の平均を見ると、この地域で検出数が増加する奈良時代の掘立柱建物跡の平均32.74m²と竪穴住居跡の総平均28.89m²は、ほぼ似かよった数字である。

付表2 由良川流域の掘立柱建物跡規模分布表

	~10 m ²	~20 m ²	~30 m ²	~40 m ²	~50 m ²	~60 m ²	~70 m ²	~80 m ²	~90 m ²	~100 m ²	~160 m ²	面積 平均	有効 棟数	掘総数
弥生中 期・中	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0		0	1
弥生中 期・後	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0		0	3
弥生後 期	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	7.52	3	3
弥生末 ~庄内	0	2	0	2	0	0	0	0	0	0	0	26.01	4	4
古墳前 期	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0		0	0
古墳中 期	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0		0	0
古墳後 期	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	21.73	1	1
古墳末 期	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0		0	0
飛鳥	0	1	1	1	2	1	0	0	0	0	1	46.21	7	10
奈良	0	2	7	9	1	1	0	0	0	0	0	32.74	20	22
小計	3	5	9	12	3	2	0	0	0	0	1	28.1	35	44
%	8.57	14.29	25.71	34.29	8.57	5.71	0	0	0	0	2.86	27.05	100	125.7

このことから、この平均床面積30㎡前後が、当地域における住居の一般的に必要な広さであるといえる。ただし、割合的には10㎡代～20㎡代が多く、特殊性も考えられる特別大きなものを省いて床面積の平均値を求めるならば、当然数値は小さくなり、20㎡代のものが一般成員の住居の中心的な大きさとなろう。^(注10)

②一般成員以外の住居

当地域における住居の一般的な広さが前述どおりなら、床面積10㎡以下と逆に40㎡よりはは特別な(一般的ではない)ものといえる。10㎡以下のものを、掘立柱建物跡でいうなら倉などとして報告されるもので、一般住居ではない。竪穴住居においても、住居以外の機能を持っていたものも多いと考えられる。

40㎡代以上はどうであろうか。

由良川流域の実例として、舞鶴市志高遺跡の弥生時代中期中葉・後葉の竪穴住居をみてみる。^(注11)昭和60年度以降に調査された中期の竪穴住居跡で、面積のわかるものは8基検出された。これらの住居跡から出土した遺物をおおまかにまとめたものが付表3である。この遺跡で面積の狭い住居跡は、S H85202・S H85205である。面積は33.2㎡と一般的なものよりやや広めではある。その出土遺物は、前者で整理箱にして1箱、後者で4箱である。土器・石器類の他、S H85205では、管玉やヤリガンナ等の一部と考えられる鉄器片も出土している。

床面積が40㎡代となるS H85210では、出土遺物は整理箱にして5箱出土した。石器類の中に石鏃や管玉の未製品や剝片、原石などが含まれる。

50㎡代となるとものは、S H86203、S H86204、S H86212がある。全面的に検出されたものは、S H86203だけである。遺物の出土量を示した記載がなく比較しにくい、土器が61個体出土している。石器類は石鏃や管玉のほかサヌキトイドの剝片が出土している。また、S H86212では、台石が逆向きにおかれた下の小ピット内から半裁された銅剣形石剣の基部が出土している。

150㎡代のもの(S H86201)は、極めて広く、特殊なものといえるが、検出された状況は、大きさ以外は他に検出されたものと変わらず、その機能の中心は「住まい」といえる。出土遺物は整理箱にして8箱出土した。石器類の中には、紅簾片岩の石鋸があり、管玉の製作に使用されたものであろう。この他、鉄器類が2点出土しており、鉄剣の一部とされる。

面積30㎡代のものは比較的出土遺物は豊かではあるが、40㎡代以上のものと比べると、石器の剝片が少ない点や管玉の未製品などを含まないこと、鉄製品出土点数、また全体の遺物の出土量など差がある。中期の30㎡未満のものは検出されておらず、正確には比較できないが、志高遺跡後期の30㎡未満のもの(S H86246)をみると、土器のみで明らかにそ

の遺物出土内容は劣る。150㎡代のものは、規模がズバ抜けており、特殊なものである可能性もあるが、由良川流域では、こうした40㎡規模以上とりわけ50㎡以上の住居が上位層の住まいであったのであろう。志高遺跡では、150㎡代と同時期の直径8m(床面積50.24㎡)の住居跡から、磨製石剣の破片が出土しており、参考となる。

また、志高遺跡では、この150㎡代の住居と自然流路をはさむ形で、これと相前後する時期の1辺15.5mを測る方形の貼石を持つ墳墓が検出されており、一般成員とは隔絶した差を有する有力者が存在したことを示す。この墳墓と、150㎡代の住居が直接関わるかどうかは不明であるが、墳墓の状況からみると階層差は明らかであり、こうしたことが、住居の規模にも現れていたのではないだろうか。^(注12)

都出氏は『住居と消費生活の単位』の中で「大型住居は、石器の剥片や未製品が遺存す

付表3 志高遺跡の竪穴住居跡内遺物

住居跡	形態	面積	時期	出土遺物	備考
S H85202 土器・石鏃・錐・銅剣形石剣破片・石皿	円形	33.2	弥生中期・中	整理箱1箱	
S H85205 土器・石鏃・錐・磨製石剣片・磨製石斧・石皿・剥片・碧玉製管玉・鉄片・石鏃・砥石	円形	33.2	弥生中期・後	整理箱4箱	
S H85209 土器・砥石	円形	41.8	弥生中期・中	少量	
S H85210 土器・石鏃・不定刃器・敲石・砥石・サヌキトイド剥片・磨製石剣未製品・管玉原石・未製品	円形	44.2	弥生中期・中	整理箱5箱 土器60個体	
S H86201 土器・有孔円板・石鏃・錐・石斧・砥石・くぼみ石・敲石・石鋸・管玉・環状石斧・鉄製品4点・鉄剣の一部	円形	150	弥生中期・後	整理箱8箱	約4分の1検出
S H86203 土器・石鏃・碧玉製管玉・サヌキトイド剥片・鉄鏃	円形	55.4	弥生中期・後	？ 土器61個体	
S H86204 土器・サヌキトイド剥片・石鏃・石錐・碧玉製管玉	円形	50	弥生中期・後	？	一部検出
S H86212 土器・ミニチュア土器・銅剣形石剣基部・サヌキトイド剥片		50	弥生中期・後	？	約5分の2検出
S H86202 土器・管玉	円形	50	弥生後期	少量	遺構の残欠
S H86246 土器	隅丸方	14	弥生後期	？	

ることが多く、かつ鉄器やガラスの装身具等の貴重品が遺存する比率が高いので、階層的に上位の家長世帯の住居であると同時に共同作業所や集会場の性格をあわせもった住居と考えられる。」と述べられている^(注13)。少なくとも大型のものが「住まい」であるならば、これが上位層の住居であることは、志高遺跡の状況と比較しても首肯されるところである。

40㎡代以上、とりわけ50㎡代以上のものは、弥生時代と古墳時代末期～飛鳥時代以外には検出されていない。古墳時代以降の分布を見ると、古墳時代末期～飛鳥時代は後におくとして、この規模以上は姿を消している。50㎡という規模を境として、大きな断絶があったと考えられる。先述のごとく、一般成員の住居の広さが30㎡弱であるならば、この倍近くの広さとなる住居は、やはり有力者クラスのものであるといえる。

50㎡以上の比率を見ると、弥生時代では、全体の28.5%となる。

(3) 分布表に現れた画期

弥生時代中期中葉から奈良時代までの竪穴住居跡の床面積を見ると、弥生時代、古墳時代、奈良時代と段階的に減少している。由良川流域においては、これらの時代の境に大きな画期が見られる。

①弥生時代 中期中葉においては、検出された住居跡が少ないので、今後の発見によって大きく変わる可能性は否定できないが、現状では、中期後葉以後のこの地域とは様相を異にする。それは、60㎡以上が検出されておらず、40㎡代前後にほぼまとまる点である。弥生時代中期後葉以降が、大きいものから段階的に分布しているのとは異なる。(2)で述べたように、住居の床面積の規模が成員の階層的なものを具現しているとするならば、由良川流域において、弥生時代中期中葉では、差が比較的大きくなかったものが、中期後葉以降階層化が明確化したことを意味しているのではないだろうか。先述した、1辺15m級の貼石を持つ方形周溝墓の出現との関わりが推察される。

②古墳時代 弥生時代から古墳時代へと分布図を見てみると、その変化は著しい。古墳時代にはいると50㎡代以上が姿を消している。極めて特徴的な変化である。これは、上位層のものが竪穴住居に住まなくなった結果であるといえる。逆に言えば、別の住居型式に住み変わったと考えられる。先に引用した都出氏の同文^(注14)では、竪穴住居が小規模となる変化を「弥生時代後期後半は弥生時代を特徴づけてきた環濠集落が解体しはじめた時である。これまで首長と一般成員とは同じ環濠集落に住んでいたのにたいし、この時期以後、首長は民衆とは別の場所に自らの居館を構えるにいたる。」と指摘される。由良川流域においては、こうした首長層が構えた居館は検出されておらず、古墳時代の掘立柱建物の検出も極めて少ない状況ではあるが、こうした変化が古墳時代にはじまったと考えるのが妥当であろう。

③古墳時代末期～飛鳥時代 古墳時代前期から後期まで姿が消えていた50㎡代のものが見られる。これは、たまたま古墳時代の末期以前のものが検出されていないだけのことであろうか。このことは、40㎡代の割合をも含めて考えてみたい。古墳時代が、40㎡代・50㎡代あわせて9.5%であるのに対し、飛鳥時代では24%を占め、規模が広いものが増えたことがわかる。堅穴住居規模の上位が、この時期広くなったといえる。

この現象を考える1つの参考として、福知山市の下山古墳群^(註15)をあげる。ここは、後期の横穴石室を主体部とする群集墳であるが、このうち下山2期(6世紀後葉)と3期(7世紀代)の間に画期が見いだされるという。報告を見ると、「3期以降の古墳には、無遺物・小規模(単次葬)・等質・多数という特質が指摘される。2期以前の群集墳は首長を中心とする特定層が累世的に造墓活動を行ったもので、3期以降の群集墳は短期間に広い層が多数の造墓活動をおこなったもの」と理解されている。より広い層が石室を築くようになるという社会現象があるならば、それを、中間層の充実ととらえることも可能であろう。古墳時代に入って掘立柱建物に住み変わっていった上位層の者と、一般成員との中間層の住居の床面積が、古墳時代末期から飛鳥時代にかけて、広がったのであろうか。恐らくこれは、中間層の充実がこれまでの住居をより広くすることを要求した結果と推察される。

もちろん、堅穴住居の規模拡大にとどまらず、掘立柱建物の検出例が認められたことでもわかるように、堅穴住居から掘立柱建物への移行が広がり始めるのがこの時期でもある。

④奈良時代 すべての堅穴住居の規模が30㎡未満となる。これもまた、大きな画期である。掘立柱建物の規模分布表を見ても検出数では堅穴住居を上回るようになり、由良川流域において、この時期に、依然として堅穴住居に住まいする者を残しながらも、掘立柱建物に住むことが一般化したことを示す。

以上、堅穴住居規模の変遷からいくつかの画期が読み取れることがわかった。これらが何を契機に始まったのかは、今後の検討されるべき課題であろう。

4. おわりに

都出氏の『家とムラ』・『住居と消費生活の単位』などで論じられているように、「堅穴住居の1棟こそが、炊飯を軸とする消費生活において、最も基礎的な単位であったことが認められる」ことを基礎にして、堅穴住居跡の規模の変化に現れる、由良川中・下流域の、弥生時代中期中葉から奈良時代にかけての集落の変遷を追いかけてみた。あくまで、堅穴住居の規模の変遷から集落の構造的な変遷を垣間みようと試みた。これまでに唱えられていることの追認とデータの曲解に終始してしまった点も多くあるものの、当地を考えるにあたっての1ヒントとなれば幸いである。

最後になりましたが、京都府埋蔵文化財調査研究センターを離職し、教職に付いて10年を迎えようとしているにもかかわらず、こうした拙文の発表の機会を与えていただいたことを記して感謝申し上げます。あわせて、京都府北部地域の文化財担当者の方々には、資料や報告書をいただいたことを御礼申し上げます。

(ふじわら・としあき＝京都府立大江高等学校教諭)

注1 崎山正人他「広峯古墳群の調査」(『駅南地区発掘調査報告書』 福知山市教育委員会) 1989.3

注2 「大田南5号墳」(峰山町教育委員会) 1994.8

注3 門脇禎二「丹後王国論の序章」(『丹後大山墳墓群』 丹後町教育委員会) 1983

注4 田代弘「由良川中流域の弥生時代中期の集落遺跡について」(『京都府埋蔵文化財論集』第2集 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1991

注5 西岸秀文「由良川流域の古墳時代集落概観」(『京都府埋蔵文化財論集』第1集 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1987

注6 細川康晴「奈良時代の掘立柱建物跡について」(『京都府遺跡調査報告書』第19冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1993

注7 藤原敏晃「中丹地域における8世紀の竪穴住居跡」(『京都府埋蔵文化財論集』第1集 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1987

注8 都出比呂志「家とムラ」(『日本生活文化史』1 河出書房新社) 1975

注9 肥後弘幸他「志高遺跡」(『京都府遺跡調査報告書』第12冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1989

注10 掘立柱建物跡の場合、例2は綾部市の綾中遺跡検出の郡衙跡とも推定される大型の建物も含めて、平均床面積を求めている。これを「住まい」と区別して面積を求めるなら、当然平均面積は狭くなる。

注11 注9に同じ。

注12 志高遺跡では、中期後葉において3種類(貼石墓・方形周溝墓・土壙墓)の墓の共存が判明している。

注13 都出比呂志「住居と消費生活の単位」(『日本農耕社会の成立過程』 岩波書店) 1989

注14 都出比呂志「竪穴住居と消費単位」(『日本農耕社会の成立過程』 岩波書店) 1989

注15 崎山正人『下山古墳群』Ⅲ 福知山市教育委員会 1994.3

付記 付表1・2は、以下の遺跡の報告書により作成した。

花ノ木・志高遺跡、桑飼上遺跡、青野遺跡、青野南遺跡、綾中遺跡、西町北大坪遺跡、青野西遺跡、三宅遺跡、小西町田遺跡、宮遺跡、ケシケ谷遺跡、奥谷西遺跡、洞楽寺遺跡、多保市遺跡、多保市城下層遺跡、大内城下層遺跡、城ノ尾遺跡、広峯遺跡、狸谷遺跡、石場遺跡、石本遺跡、中遺跡